様式2

令和元年度学校自己評価表

鳥取県立倉吉西高等学校

中長期目標 （学校ビジョン）	（1）道徳教育の充実 ・高校生として望ましい規範意識、生活習慣を確立する。 ・自己肯定感を高めるとともに、他者に対する思いやりなど、周囲と豊かな人間関係を構築することのできる豊かな心を育む。 （2）キャリア教育の充実 ・社会的問題に関心を持ち、社会の一員であることを自覚させる。 ・探究活動をとおして、社会的問題の解決に向けて必要となる能力を育成する。 ・将来の生き方を前提とした進路指導を展開する。 （3）高い志を有し、学ぶ意欲を向上 ・将来の生き方を考えさせることで主体的に学ぶ姿勢を涵養するとともに、社会問題の解決に向けて必要となる確かな学力を育成する。 ・授業をとおして論理的思考力、表現力、コミュニケーション能力を高める。	今年度の 重点目標	（1）将来を見越した生活習慣の確立 （2）キャリア教育の充実 （3）主体的な学習姿勢の構築、及び学力の向上 （4）情報収集、情報発信の充実 （5）学校業務改善の取組の推進

年度当初					評価結果（年度末反省）			
評価項目	評価の具体項目	現状	目標（年度末の目指す姿）	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価		改善方策
将来を見越した生活習慣の確立	①社会や人とのつながりを意識した生活習慣を身につける	【生活支援】 ・全般的に挨拶はできている。特に、野球部の立ち止まっての挨拶は、外部からも好評である。 ・授業や集会での聴く姿勢は良い。講演を受けて自分の生活や行動につなげる姿勢に乏しい。 ・自分の置かれている状況や立場を考えて行動できない場面がある。	・自然に自分から好感の持てる挨拶ができる。 ・授業や集会などで顔を上げて、きちんと話を聴くことができるとともに、積極的に自ら発言をすることができる。 ・TPOを意識した行動をとることができる。 ☆日常的な生徒観察により評価する。 ☆は評価の方法（以下同じ）	・積極的、意欲的な行動や姿勢をとった生徒を褒めて育てる。 ・挨拶することの意味をステージやホームで繰り返し話すことで伝える。 ・授業も含め日常的に発言できるように、生徒が発表する機会を数多く設定する。 ・次なるステップが自分で明確にできるよう、メモや記録化で指導する。（生徒手帳の復活）	・校舎内では自分から挨拶できるが、登校時の挨拶は自分からは中々できない。好感の持てる挨拶については依然ハードルが高い。 ・自販機やケータイ・スマホの校内ルールについて生徒会長が生徒に話をする機会を設けた。後期生徒会は「冬の三倍速運動」を新たに実施した。 ・講演会で質問する生徒が多かった。特に、S1生の積極性が目立った。 ・TPOを意識できる段階には至っていない。服装検査は随時実施した。 ・生徒手帳の復活について提案できていない。	C	B	・積極的、意欲的な行動や姿勢をとった生徒を褒めて育てる。 ・挨拶することの意味をステージやホームで繰り返し話すことで伝える。 ・授業も含め日常的に発言できるように、生徒が発表する機会を数多く設定する。 ・次なるステップが自分で明確にできるよう、メモや記録化で指導する（生徒手帳の復活）。
	②講演会・生徒会活動等を通して人としての生き方を学ぶ	【生活支援】 ・生徒会の行事、委員会等各種活動に積極的に取り組んでいる生徒が多い。	・多くの生徒が生徒会の行事、委員会等各種活動に積極的に取り組んでいる。 ☆行事反省、委員会の振り返り等で評価する。	・生徒会の行事、委員会等各種活動を通して、生徒が責任を持って主体的に取り組むことに喜びや達成感を持てるよう寄り添いながら指導する。	・生徒会の行事や委員会活動に、主体的に積極的に取り組むことができた。生徒会執行部への希望者が多く、二期続けて面接選考を行った。	B		・生徒会の行事、委員会等各種活動を通して、生徒が責任を持って主体的に取り組むことに喜びや達成感を持てるよう寄り添いながら指導する。
		【S1】 高校3年間で何を学び、将来どうやって社会に貢献していくかという明確なビジョンを持っている生徒は少ない。	・将来学びたいことが明確になり、そのために今、何をすべきか判断し、行動することができる。 ☆CHALLENGE NOTE等による観察で評価する。	・様々な講演会や諸活動に意図的に取り組ませ、感想や気づきを継続的に記録し、振り返りながら、自らの生き方について考えさせる。	・講演会、考査、学校祭などの行事や取組において振り返りシートやチャレンジノートを活用し、自らの生活や生き方について考える生徒が増えてきている。 ・活動の振り返りを、自らの生活や行動に活かせない生徒も見られる。	B		・入学後の初期指導で徹底させる必要がある。 ・活動の振り返りや記録の蓄積をしていくことの重要性について理解させ、指導を継続していく。
キャリア教育の充実	①チャレンジグループ活動の情報収集～整理・分析～発信のスパイラルを確立し、個人研究を充実させる	【キャリア支援】 ・CHALLENGE　NOTEを活用し、活動を記録している。 ・成果を発表する機会が増え、生徒同士の評価や研究の深化につながっている。S1・S2の生徒は、発表を聴いて学んだことを自らの研究活動に活かしている。 ・大学訪問や講演会等を通して、大学入試制度など進路への理解が深まっている。 ・合格者や卒業生の体験談を聴き、進路意識やチャレンジグループ活動に対するモチベーションが高まっている。	・ノートに内容や感想を主体的に記録する習慣が身についている。 ・大学・学部、職業に関する理解を深め、テーマ設定や研究活動が自らの進路につながっている。 ・フィールドワークなどの研究成果をまとめ、情報機器を活用して校内の発表に限らず校外でプレゼンテーションを行っている。 ☆S3のチャレンジグループ活動のアンケートにおいて、「積極的に取り組めたか」、「講義や施設見学により仕事や施設の役割などの理解を深めることができたか」、「さらに学びたい、知りたいなどの知的好奇心が深まった」、「進路目標が決まったり、目標に対する情熱が高まったなど、影響を与えた」の各質問項目いずれにおいても、6割以上の生徒が「とても思う」と回答している。	・テーマと進路がつながる指導をするために、大学の学部や研究に関する情報を提供する。 ・各ステージと連携して講演会などの企画の調整を図り、円滑な運営と目的の遂行に努める。 ・大学での学びとチャレンジグループ活動について、卒業生の話を聴く機会を設定する。	・S1:講演会や県内研修により、地域社会に対する理解が深まった。 ・S2:関西研修やグループ内面談等により、個人研究テーマは固まった。 ・S3:①とても思う②やや思う（%） 「積極的に取り組めたか」①26.5②64.1 「講義や施設見学により仕事や施設の役割などの理解を深めることができたか」①45.3②47.0 「さらに学びたい、知りたいなどの知的好奇心が深まった」①32.5②62.4 「進路目標が決まったり、目標に対する情熱が高まったなど、影響を与えた」①29.3②54.3 ①のみだと6割に達していないが、①と②の解答は全てほぼ9割程度に達している。	C	B	・探究活動が進路につながる学習の場であることを理解させる。フィールドワークや進路指導、個人面談などにより探究活動のテーマの重要性を認識させ、興味・関心、進路につながるテーマ設定をするよう指導する。 ・研究や発表の場に関する情報を発信し、生徒一人ひとりが積極的に校外でも研究を深めていく機会を増やすよう指導する。
		【S1（パイオニアホーム含む）】 ・チャレンジグループ活動に積極的に取り組みたいと考えている生徒は多い。	・自らの明確な意思でチャレンジグループを決定し、個人研究テーマを設定している。 ☆CHALLENGE NOTE等による観察で評価する。	・CHALLENGE　NOTEを有効活用し、様々な体験を積み上げていく。	・フィールドワークイン鳥取、鳥大オープンキャンパス等で様々な業種、学問分野に触れ自らの進路について考え、チャレンジグループを決定しようとしている。	B		・チャレンジノートの記録をチェックし、記録を積み上げていくことの大切さを理解させ、記録の質を高める。
		【S2（パイオニアホーム含む）】 ・S1次に決定した研究テーマをもとに、情報の収集、分析方法について検討し、計画的に探究活動を進めようとしている。	・探究活動をとおして、研究テーマに係る問題意識を育み、その解決に向けて情報収集、整理・分析し、多角的に方策を考えている。 ☆CHALLENGE NOTE等による観察で評価する	・S3の発表、講演会、施設・企業等の訪問の機会をとらえ、社会に対する視野を広げるとともに、個別面談により、進捗状況確認や個別指導を適宜行う。	・フィールドワークイン関西などの外部との関わりにより視野を広げられた生徒も多い。 ・個人面談を繰り返したことで探究が深まった生徒が多いが、自分の進路と探究のテーマとの関連が乏しい生徒もいる。 ・西京高校との交流を通して、考え方や行動に変化が見られ、視野の広がりや進路意識が高まった生徒が多い。 ・講演会を通して将来の生き方や進路選択について深く考える生徒が増えた。	B		・進路目標（学びたいこと）を明確にするために、S1、S2でのチャレンジグループ活動や進路学習を計画していく。 ・自らの進路に関連したテーマ設定になっているかを職員間で連携して指導していく。
		【S3（パイオニアホーム含む）】 ・S2次早々に決定したテーマに沿ってフィールドワーク等を行い、レポート作成に取り掛かっている。 ・進路と関連させて探究を深めている。 ・S2次の西京高校との交流によって、視野が広がり問題意識が高まってきている。	・充実した内容の発表や報告書を完成させ、活動終了後は、希望の進路実現へと繋げている。 ・チャレンジグループ活動を通して、自らの進路目標を明確にし、将来、社会に貢献していく態度を身につけている。 ☆【キャリア支援】に同じ	・適宜個人面談を実施し、活動の進捗状況を把握するとともに、助言を与える。 ・生徒が「社会貢献」という大きな目標を見失わないよう、生徒の表情や行動に目を向け、声を掛けるタイミングを逃さないようにする。	・計画どおりに研究を進め、全員が発表することができた。グループ内外の発表を聴きながら自分の探究活動を振り返り、報告書作成に活かすことができた。 ・進路目標が明確になり、関係する現場を訪問するなど、問題意識をもってさらに研究を進めている姿も見られた。	B		・AO入試で受験する生徒が、チャレンジグループ活動の成果を活かせることが望ましい。
	②地域社会の問題に関心を持つとともに、アウトプット能力を向上させる	【S1】 ・ボランティア活動の目的を理解して、自ら進んで行動していこうとする姿は多い。	・ボランティア活動に全員が一回は参加し、社会の中での自分のあり方を考え、社会の課題に気づき、解決策を考えようとする姿がみられる。 ☆ボランティア発表会に向けた作品づくりで評価する。	・ガイダンスでボランティアの取り組みを説明し、さらにボランティア活動参加前の事前指導を行い、学び・気づき・課題・解決策などを記録し、ホームで発表する。	・98%の生徒がボランティア活動に参加し、様々な社会の課題に気づき、解決策を模索する姿が発表会で見られた。	A		・ステージ2でも継続的に参加を促し、報告書を提出させることで今年度の取り組みをより深めていく。

A：9割達成、B：8割達成、C：6割達成、D：4割達成、E：4割未満

評価項目	評価の具体項目	現　状	目標（年度末の目指す姿）	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価		改善方策
主体的な学習姿勢の構築、及び学力の向上	①深い学びへのプロセスやICTを取り入れた授業改善を行う	【学習企画】 ・授業を大切にする生徒の意識が高まり、教員の設定した目標に主体的に取り組む土壌ができつつある。 ・学習習慣の定着は生徒による個人差が大きい。 S1：家庭学習時間2時間以上は前期継続的に70％を超えたが、後期考査時期を除いて未達成(通年平均79％) S2：同上2時間半以上達成は考査時期のみ(通年平均55%) S3：同上5時間以上37％（ただし、7月以降） いずれも目標は達成していないが、数値は一昨年度より向上している。 ・iPadなどICT機器を取り入れた授業も増えてきてはいるが、効果的な活用について今後も研究を必要としている。またICTを活用する環境整備にも工夫改善が必要である。	・生徒自身が考え、表現する機会をさらに増やすなど生徒の自発性、積極性を引き出す授業を行い、生徒のアウトプットの機会を増やす。 ・授業に主体的に参加するために、実のある主体的な家庭学習を行う時間が確保できている。 ・客観的な思考及び判断ができる。 家庭学習時間の目標値 S1：2時間以上の生徒が継続して70％以上。 S2：2時間半以上の生徒が継続して70％以上。 S3：県総体後5時間以上の生徒が50％以上 。 ☆生活の軌跡の記録で評価する。 ☆生徒授業アンケート：1～5の各項目について、前年比10％アップまたは80％以上。 1　思考・判断・表現を求める授業過程 2　アクティブラーニングの視点 3　発問の工夫 4　自然・社会等身の回りの事象とのつながり 5　関心・意欲の喚起	・校内研究授業を実施し、授業後には教員全員参加の研究協議を行って工夫した点や成果についての情報共有を行い、得たものを授業で活用し、生徒に還元していく。 ・考査の問題も「思考」「判断」「表現（論述）」を意識した出題につとめる。 ・授業づくりのヒントとなるように、ICTを使った授業実践の動画等のデータを蓄積していく。 ・生活の軌跡を利用して面談を実施する。 ・具体的な生活時間を提示する。	・対話をとおして自身の考えを見出し表現することのできる生徒が徐々にではあるが増えてきている。逆に他へ依存してしまい自分の考えが述べられない生徒もいる。 ・与えられた課題を自分の力で解く生徒もステージが上がるにつれて増え、さらに与えられたもの以外に自発的な課題に取り組む生徒も出てきてはいるが、まだ一部である。 ・課題提出は昨年以上に良くなってきているが、特定の生徒の気まぐれさが目立つ。取り組みの質についてはまだまだで、95％には及ばない。 ・プロジェクター等従来の機器については、ほぼすべての教員が活用している。タブレットに馴染みのなかった教員も使い慣れた先生に使い方を尋ねたりしているところ。 ・家庭学習時間の目標値に関して 学習習慣の定着は生徒による個人差が大きい。 S1：家庭学習時間2時間以上は8，9，11月を除いて未達成(通年平均55%) S2：同上2時間半以上達成は6，8，9，11月のみ(通年平均48%) S3：同上5時間以上32％（ただし、6月以降） いずれも目標は達成していない。 ・生徒授業アンケートの目標値に関して 全体では、項目3を除き、「はい」の回答が昨年度より微増。経年変化を見ても、徐々に「はい」の答えが増えている。項目1，2に関しては「はい」が80％をこえた。 ステージ別でみると、現S2が昨年度S1に対して、「はい」の回答が全体的に減っている。	C	B	・授業研究会やアクティブラーニング研修会、またICT機器を使った授業改善を来年度も継続して取り組んでいく。 ・家庭学習時間の確保とその質の向上のために、学習時間調査のデータや考査結果などを生徒個人個人に示すように工夫する。
	②高い志の実現に向け、予習・授業・復習のサイクルを確立する	【S1】 学力を高めたいという思いはあり、与えられた課題には積極的に取り組めるが、各自が工夫した学習にはなっていない。	・常に向上心を持ち、家庭学習を定着させ、定期考査や模試を節目に、PDCAサイクルを意識した実践をする。 ☆【学習企画】に同じ	・担任、教科担当者が面談等の機会をとらえながら、丁寧に個別指導を行う。	・学習時間2時間以上の生徒の割合は4月：34%5月：26%6月：35%7月：36%8月：87%9月：87%10月：53%11月：98%12月：50%1月：37%2月73%で目標達成4回。 ・家庭学習時間が確保できていない生徒や低学力の生徒に対して声掛けや個別に指導を行ってきたが、変われない生徒も数名いる。 ・課題提出の状況も90％を超えているが、未提出者も固定化されている。	C		・学習時間の定着、課題提出の習慣が未定着の生徒に対し、0学期を一つの節目とし、声掛けや個別指導を今後も粘り強く継続して行っていく。また、課題の質を向上させる。
		【S2】 ・多くの生徒の学習習慣は定着しつつあり、与えられた課題に対しては取組むことができているが、自ら計画を立て、工夫して学習に取組む生徒は少ない。	・進路目標を明確に持ち、定期考査や模試を節目に、PDCAサイクルを意識した実践をする。 ☆【学習企画】に同じ	・面談、保護者懇談等の機会をとらえ、現状分析と目標設定を行い、自らの課題に対して前向きに取組めるように個別指導を行う。	・学習時間2時間30分以上の生徒の割合は4月：33%5月：29%6月：90%7月：25%8月：80%9月：90%10月：28%11月：92%12月：27%1月：44%2月66%で目標達成4回。 ・1月2月においては学習時間増加の傾向がみられる。 ・学習時間が1時間/日に満たない生徒も数人見られる。 ・生活の軌跡の様式を変更し、スマホ(学習目的以外）使用時間を把握し、個別に指導することができた。また、計画を意識して取り組む生徒が増えた。	C		・学習時間が少ない生徒や気になる生徒に対して個別面談を継続的に行う。 ・スタディーサプリを活用し、個別の課題に対して取り組む仕組みをつくる。 ・生活の奇跡を今後も継続し、効果的な活用となるよう工夫していく。 ・ステージ集会やSHRなどを通して受験生としての意識を高め、目標に向かって進む集団づくりを行う。
		【S3】 ・受験を控え、希望の進路を実現するために向学心が高まってきている。 ・休憩時間や放課後等に生徒同士で教え合っている姿が頻繁に見られる。	・各自がスケジュール管理でき、隙間時間の学習や家庭学習を充実させている。 ・定期考査や模試を節目に、PDCAサイクルのCAを実践し、本物の学力を定着させる。 ☆【学習企画】に同じ	・模試の結果をもとに、各自が自分の現状を分析し、勉強の仕方を工夫できるよう、適宜個別指導を行う。 ・SHRの時間を大切にし、自己実現のためには「セルフマネジメント」出来ることが重要であると伝え、助言していく。	・学習時間5時間以上の生徒の割合は6月：19%7月：6%8月：58%9月：53%10月：19%11月：52%12月：18%2月66%で目標達成3回。 ・定期考査や模試を節目と考え、「今未来手帳」を活用してスケジュール管理しながら受験勉強に取り組めていた。 ・「受験は団体戦」を実践し、互いを思いやりながら放課後などの学習に取り組んでいた。 ・自主研修期間も、進路決定した者も含めほぼ全員が登校し、学力の向上に努めた。	B		・自主研修期間中、進路決定者の研修場所と受験を控えた生徒の学習場所とを分ける必要がある。 ・進路決定後の自主研修についての報告会を3回実施し成果はあったが、特別課外や個別指導、他学年の授業もあり時間の工面が難しかった。今後の自主研修の形をどうするか検討が必要。
	③校外模試成績を含めた学力を向上させる	【キャリア支援】 ・各教科の模試分析をもとにS1・S2拡大ステージ会を行い、課題・対策の共有を図っている。 ・模試に向けて、各教科で課題やテスト等に計画的に取組んでおり、生徒の目的意識や意欲は徐々に高まってきている。 ・受験後、自己採点や見直しなどの指導をし、「受験→見直し・自己分析→次回への目標設定と対策」のサイクルを習慣化するよう取組んでいる。 ・長期休業中課外、放課後センター演習、2次課外により学	・全教員が生徒の学力を把握し、課題や取組み等の情報を共有し、全体指導や個別指導など必要な対策を講じる。 ・模試の取組みについても、PDCAサイクルが確立されている。 ☆S1：7月進研模試の結果に基づき実態に応じた目標値を設定。 ☆S2：1月進研模試の3教科の平均偏差値が48以上。 ☆S3：センター試験540以上（900点満点）の生徒が30名以上。 センター試験を利用した国公立大現役合格者（推薦Ⅱ、AOⅡ、一般）30名以上。	・模試の目的と意義を生徒に理解させ、目標をもって取組ませる。 ・大学入試制度の変更に備え、情報収集に努めるとともに、拡大ステージ会の在り方を検討し内容の充実を図る。	・目標値　11月結果→1月結果 S1:目標48　44.4→48.0 S2:目標48　44.8→46.6 11月以降進路意識が高まり上昇傾向にある。 S3:目標 センター試験540点以上23人。センター試験の平均点が前年より文系-22点、理系ー19点であったことを踏まえ、520点以上とすると該当は28人。目標はほぼ達成することができた。 センター試験を利用した国公立大現役合格者は36人（3月23日時点）。目標は達成し	A		・受験の実情について、LHRや保護者説明会等で生徒や保護者に伝えていく。 ・生徒だけでなく、S3担任から、S1・S2生徒に対し受験体験談を話してもらう機会をつくる。 ・より一層「授業第一」を意識させる。 ・基本的生活習慣を身につけさせ、学力向上を図る。
		【パイオニアホーム（他ホームに広げることを含む）】 【S1】 ・学習意欲は高く、課題に対して熱心に取り組み、期限を守って提出できる生徒が多い。 ・学習習慣と学力とのバランスが取れている生徒が多い。	【S1】 ・常に向上心を持ち、家庭学習を定着させ、定期考査や模試を節目に、PDCAサイクルを意識した実践をする。 ☆【キャリア支援】に同じ	【S1】 ・「生活の軌跡」を有効活用し、個々の生徒の取組みに対して振り返りを促し、改善を図る。 ・拡大ステージ会により生徒の状況や問題点の共通理解を図る。 ・過去問などにより模試対策を行う。	・1月に進研模試の目標偏差値48に対して48と目標値に到達した。しかし上位層が少ない。 ・年間を通じ、パイオニアホーム一人当たり1日平均学習時間188分と主体的な学習者としてステージをリードし、他ホームにも良い影響を与えている。 ・オープンキャンパスで学びへの意識を高め、進路目標を高く掲げ学習に取り組んでいる。	A		・ステージ内で情報を共有し、声掛けや指導を継続して行う。 ・今後も進路意識を高めていくことを継続して行っていく。
		【S2】 ・勉強と部活動の両立に努力しているが、生徒会活動に積極的に取組んでいる生徒は少ない。	【S2】 ・自己管理を徹底し、先を見越して計画的にものごとを進め、学習面、生活面ともに、学校やステージのリーダーとして集団を引っ張っている。 ☆【キャリア支援】に同じ	【S2】 ・各自が目指す姿を設定し、パイオニアホーム独自の見学や体験をとおして視野を広げ、自分を高めるための具体的な工夫をする。	・定期考査や模試において目標設定と振り返りを継続して行い、学習や進路に対する意識が高まった生徒が増えてきた。 ・保護者懇談会で生活習慣のルーブリックを用い、自らの生活を振り返り、7月よりも生活の質が高まってきた生徒が多い。	B		・「今未来手帳」を全員に配布し、その活用を通して自らの振り返りや先を見据えて計画を立てる習慣を身につけさせる。 ・考査や模試の目標設定・振り返りシートを今後も継続し、PDCAのサイクルを意識した取り組みを実践させていく。
		【S3】 ・各自がパイオニアとしての自覚を持ち、主体的に学習や学校行事、部活動に取組み、人間的成長が見られる生徒が増えている。 ・学習習慣も定着してきており、放課後に残って学習したり、他ホームの生徒とも教え合いが出来ている。	【S3】 ・将来への展望を持ち、自分を高めることに妥協を許さず鍛錬し続ける心の習慣を身につける。 ☆【キャリア支援】に同じ	【S3】 ・SHRなどで具体的に話をする中で、パイオニア性について常に意識させ、行動に繋げさせる。	・ほとんどの生徒が将来への展望を持ち、自分を高めるために寸暇を惜しんで集中して学習に取り組んでいた。時期を逸することなく個別指導したにも関わらず、進路決定後も意識の向上が感じられない生徒がわずかにいた。	A		・今後も、パイオニアホームの一員としての自覚ある行動と受験についての心構えを常に言い続けていく。
情報収集、情報発信の充実	学校の魅力、生徒の活動状況を積極的に情報発信する	【総務】 ＜ホームページの運用＞ ・更新件数は大幅に増加している。 （更新件数：平成29年度194件→平成30年度675件） ・アクセス数は前年度より減っている。 （平成29年度約297,400件→平成30年度約233,213件） ＜季刊倉西・倉吉西高通信の刊行＞ ・時期をずらして内容を考慮し、年4回ずつ刊行している。	＜ホームページの運用＞ ・生徒の活動や必要な情報が適宜、掲載されている。 ・担当した行事、部活動の様子を教職員が速やかに掲載している。 ・学校の情報がわかりやすく伝わるようにする。 ☆ホームページ更新件数：250件（前年度並みの指標とする） ＜季刊倉西・倉吉西高通信の刊行＞ ・保護者に学校並びにPTAの活動や方針等を適宜、伝える。 ☆季刊倉西4回、倉吉西高通信4回刊行。	＜ホームページの運用＞ ・内容を考慮し、保護者等が求める情報を載せるようにする。 ・担当した学校行事、部活動の様子を速やかに掲載できるように、適宜、担当教職員・部活動顧問への掲示呼のびかけを行う。 ＜季刊倉西・倉吉西高通信の刊行＞ ・年間計画を立て、季刊倉西では学校から保護者宛のメッセージを、倉吉西高通信ではPTA活動の紹介と参加呼びかけを主とした紙面とする。 ・季刊倉西を見やすい印刷にし、確実に保護	〈ホームページの運用〉 ・更新件数 858件（2/27現在：昨年同期613件） ・アクセス数 391,722件（2/27現在：昨年度233,213件） 〈季刊倉西・倉吉西高通信の刊行〉 ・季刊倉西 ： 春号(4月)、夏号(9月)、秋号(1月)、冬号(2月)発行 ・西高通信 ： 178号(7月)、179号(12月)、180号(2月)発行、181号(3月発行予定)	A	A	〈ホームページ〉 ・教職員への掲載呼びかけを引き続きを行う(部活動、ステージ、グループなど担当者への掲載呼びかけを行う)。 〈季刊倉西・倉吉西高通信〉 ・季刊倉西の掲載内容について検討する。 ・倉吉西高通信：引き続きPTA広報部会で内容・構成を検討する。
		＜ミッタシステムの運用＞ ・保護者の登録率は97％。 （登録切れの保護者への再登録、未登録の保護者への呼びかけを年3回行った。）	＜ミッタシステムの運用＞ ・漏れなく緊急連絡を行うことができる。 ☆保護者の登録：100％。	＜ミッタシステムの運用＞ ・未登録の保護者への登録呼びかけを行う（4月・7月・12月の3回）。	〈ミッタシステムの運用〉 ・登録切れの保護者への再登録、未登録の保護者への登録呼びかけを4月・7月・12月の3回行った（登録率96％：未登録者13名）。 ・未登録の保護者へは、12月の保護者懇談でも呼びかけをした。	A		〈ミッタシステムの運用〉 ・今後も保護者への登録呼びかけを年3回行い、その都度、未登録並びに配信不能になっている保護者へ呼びかけをする。
		＜中学生体験入学・中学校での高校説明会＞ ・体験入学では、2日間で284名が参加し、99％が「参考になった」と回答。 ・各中学校で3年生への説明会を実施した。（6月）	＜中学生体験入学・中学校での説明会＞ ・中学生や保護者が倉吉西高の情報を持っている。 ☆中学生体験入学の参加者アンケートの満足度：90％以上。	＜中学生体験入学・中学校での説明会＞ ・チャレンジグループ活動の発表を充実させ、倉吉西高の魅力が伝わるようにする。 ・体験入学は保護者にも参加を呼びかける。	〈中学生体験入学・中学校での説明会〉 ・体験入学：参加者348名（昨年度284名）（保護者16名）、99％が「満足」と回答。 ・チャレンジグループ活動をはじめ、生徒会執行部を中心に会を進行した。 ・説明会：各中学校で3年生への説明会を開催（6月）。	A		〈中学生体験入学・中学校での説明会〉 ・次年度も同様に開催する。 ・施設、部活見学において、グループの人数を少なくして説明がよく聞けるようにし、多くの部活を見ることができるように工夫したい。
学校業務改善の取組の推進	長時間勤務者の解消	・目的が重複する行事やその準備等が、勤務時間の長大化につながっている。 ・休養日などを設定した各部の活動方針が徹底されていない。	・優先順位の低いものについて1つ以上の業務削減。 ・年間の時間外業務を平成29年度比で20％削減。 ・休養日、活動時間を設定した活動方針の全部活動への徹底。 ・部活動に係る時間外業務80時間以上勤務者の解消。	・優先順位の低い行事の整理・統合を進める。 ・管理職員が各部の休養日、活動時間を把握し、遵守を働きかける。 ・顧問体制の柔軟な運用を認める。	・西高祭日程見直し：熱中症搬送者0人 ・時間外業務削減率：18.1％（2月末時点） ・部活動活動方針・計画提出率：100％ ・部活動に係る時間外業務80時間以上：5人（のべ9人）	B	B	・それぞれ継続的に取組む。

A：9割達成、B：8割達成、C：6割達成、D：4割達成、E：4割未満